埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

<Translation> William Clowes, A Short and Profitable Treatise Touching the Cure of the Disease Called (Morbus Gallicus) by Vnctions

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2016-03-10
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 米村, 泰明
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/179

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

翻訳

ウィリアム・クロウズ著
『簡潔にして有益なフランス病と呼ばれる病の塗布剤による治療に関する論考』（2）
William Clowes, *A Short and Profitable Treatise Touching the Cure of the Disease Called (Morbus Gallicus) by Vnctions*

米　村　泰　明訳
YONEMURA, Yasuaki

はじめに

前号に引き続き、16世紀イングランドの外科医ウィリアム・クロウズ（William Clowes, 1540-1604）の著書*A Short and Profitable Treatise Touching the Cure of the Disease Called Morbus Gallicus by Vnctions*（『簡潔にして有益なフランス病と呼ばれる病の塗布剤による治療に関する論考』）[1]の第七章と第十書の一部、およびそれに続く外科医であるジョージ・ベイカー[2]による「水銀の性質と特性について」を訳出する。

第七章では著者が実際に用いた塗り薬の処方箋と使用法に続いて、水銀を用いた薬品の擁護論が展開されている。水銀と並んで梅毒治療の特効薬とされていたグアイヤックについても触れている。第八章以降はそのほとんどを潰瘍の治療後に空いた穴に肉を再生させるための焼灼剤の製法の紹介に費やしている。処方箋は省略して、第十章の読者への最後の挨拶のみ翻訳した。次いでエピローグとして、同時代の医学者で友人でもあるジョージ・ベイカーとジョン・バニスター[3]による水銀使用の擁護と使用法が掲載されている。本稿ではジョージ・ベイカーの水銀擁護論まで翻訳した。

前稿と同様、翻訳に際して1579年版の記述では意味が通じない場合には、随時1596年版（*A Profitable And Necessarie Book of Obseruations*）を参考にした。なお注はすべて訳者によるものである。また、原著はほとんど改行されていないので、読みやすいように訳者が改行した。

『簡潔にして有益なフランス病と呼ばれる病の塗布剤による治療に関する論考』

第７章

私自身がしばしば試した塗り薬

（処方箋　省略）

このように作られた塗布剤をもって、私は50歳の鍛冶屋を治療しました。彼が私に告白したところでは、この病に悩まされ、12年間にわたって食餌療法と塗布剤双方の治療を受け、しかしそれでも以前同様あるいはさらに悪化してこの病は戻ってきたというのです。感染は彼の体のあらゆる部分に広がり、すなわち硬性下疳、刺すような痛み、毒性があり腐食性の潰瘍、骨の腐敗、そして関節の痛みを伴っていました。それらを私はこの塗布剤と、この治療に属するその他の適切な手順によって完全に健康な状態にもどし、それは今日にまで続いております。

これら最後にあげた塗布剤は、この病においてときどき発生する潰瘍から、薄くて湿った腐敗物を排泄させて汚らわしい潰瘍を治します。この塗布剤の特性は、それが存在する部分に食い込み腐食させることです。このようにして悪性で有毒の潰瘍を治療するのです。確かに硬い腫れ物を柔らかくし、関節の痛みを和らげます。膿疱を癒し、虚弱な部位を楽にしてくれます。古くからの長年にわたる苦しみであっても治してくれます。正しい処方と一年の時節に従い[4]、この病の多様性に留意して用いることによってですが。

これは動物の脂、水銀および多種の他の薬品と混

キーワード：ウィリアム・クロウズ、フランス病、治療、水銀
Key words ：William Clowes, French Disease, cure, Quicksilver

ぜます。病の性質と身体の要求に応じて、機会にふさわしく用います。もしも痛みが腫れを伴うならば、メンドリやカモ、ガンの脂や他の皮膚軟化薬、溶解性の塗り薬、たとえばウスベニタチアオイの軟膏、バジルの軟膏、アラゴンの軟膏、アグリッパの軟膏、エニシダの軟膏、あるいはオイルなら、たとえばローリエのオイル、テレビンのオイル、ユリのオイル、カモミールのオイル、イノンドのオイル、バラのオイルなどを用います[5]。これらはすべて硬い腫れ物や結節を柔らかくし、静める薬効があり、痛みを和らげ、膿疱を治療します。

身体が細身できゃしゃで、塗布剤が役に立たず助けにならない時には、これらにさらにいくらかの水銀をまぜるとよいでしょう。しかし、水銀は常に純化されていないアルコールあるいは朝食前の唾液[6]、あるいは他のものと混ぜて中和させなければなりません。水銀の腐食性を阻止するためです。というのは、これらの塗り薬は古代の医学者や専門家、腕の立つ外科医によって考案され、さらに多くのものが付け加えられてきたのです。そして後世の我々もまた工夫を凝らし、付け加えてきたのです。我々もなんらかの役割を果たしているのです。たしかにそれらが大いに貴重な効能を持っていることが分かっています。ですから、次のように言う人々の意見を称賛するわけにはいきません。すなわち、水銀であるから体力を奪う、したがって用いてはならないという意見です。しかし、私はより良い薬あるいは対処法が見つかるまでは、この治療法を用いなければならないと主張します。すなわち利益の方が害よりも大きい限りです。そうであることを私はしばしば見ております。たしかに、すべての害がある薬品は、その害を排除あるいは減少させるためになんらかの矯正手段をとらざるを得ません。そのようにすべての良き内科医と外科医はしてきたのです。

ですから、これらの塗り薬には次に挙げる中和剤をいれます。すなわち、水溶性エタノール[7]、朝食前の唾液、レモン汁、ローリエのオイル、そして杜松のオイルです。これらすべてが神経を落ち着かせ、水銀の害を除去してくれる効能があります。というのは、ニコラス・マッサ[8]の梅毒の治療法を記した書物に、水銀を擁護するべく記載されているのです。つまり第四度の薬品は、第二度の薬に反対の効能を持つ薬を混合することで作られる[9]というのです。この準備の手順と矯正によって、行き過ぎた性質がその反対の性質によって制限され、低減されるのです。ですから我々は大きな障害もなく、水銀から作られているこれらの塗り薬を学識ある人々の力を借りて分類し、用いることができるのです。それはより強化され、より矯正されているのです。というのは、私が申しましたように、利益が損害を凌駕しているのです。

水銀に反対するものもおります。これは非常に強い薬で、これから作られた塗布剤は悪性の症状を引き起こすと言います。そして口や歯茎に潰瘍を形成し、粘液質の物質が夜も昼も絶え間なく流れ、それによって視覚の痛み、食欲の減退、顎の痛みなどの病弱が起きると言うのです。それに対して、私はヒポクラテスを引き合いに出して反論します。極端な病には、極端な治療が必要です[10]。再びお尋ねしたい。というのは、下剤はヘレボロスやスカモニア[11]などによって効き目が強くなっていないでしょうか。それらは胃や他の部位に害を与えます。では、それだからといってこれらを使うことを拒否すべきでしょうか。有害だからという理由で。私はそうは思いません。矯正剤によってそれらは現実に薬用であり、薬用になりうるのです。これと同じ、あるいは良く似ている証明を、我々は毎日水銀から作られた塗り薬に関して見ています。

私はグアイヤック[12]がこの病に良く効き薬効があるということを否定するものではありません。同様に先ほど述べた塗布剤も薬効があるのです。さらに私の意見は、もしこの病がグアイヤック以外の方法あるいは手段で治癒しないならば、数年のうちにインド[13]に自生するすべてのグアイヤックが使いつくされ、役に立たなくなるでしょう。この病が今そうであるようにさらに広がっていくならば、それはさらに悲しむべきことです。

しかし神に感謝します、この病を治療するには他にも多くの方法が知られているのです。そして私はさらに大胆にも、これらの塗布剤による方法がこの病の完全な治療法だと断言いたします。というのは、多くの学識ある人々がこれらの塗布剤を擁護し推薦

する文書を残しているのです。また、今日でも道理と経験によってそれらを確認しています。

私の知るところでは、多くの技術を伴わない者共が、この病を治療するために塗布剤を日ごと乱用し手順に添わずに使っております。彼らは患者がどのように冒されていようとも、ただひとつの塗布剤を用い、患者の年齢もそれを使う時期も、患者の体力も、病の経過年数も、その特別な性質にも考慮することなく、すべての人に同じ治療の手順を用いているのです。この病の多様な性質や特性を見分けることについては、彼らはガチョウほどの理解力も理性も持ってはいないのです。道理も弁えず慣行に従うだけで、すでにお話したように、ただひとつの手順を、ただひとつの塗布剤を、ただひとつの治療法をいつでも使うだけです。上手に使うこともできるのに。まるで靴職人がひとつの木型ですべての人の足に合う靴を作ろうとするようなものです。これが多くのものが悲惨な目に遭う理由の一部です。というのは病が一ヶ月もしないうちに、あるいは三ヶ月で戻ってくる人もいれば、しゃべれなくなったり声を失ったり、身体がまったく変形する人もいるのです。ですからこの病の治療においては必要条件のひとつといえども見過ごしてはならず、さもないと病は治癒しても人は置き去りにされてしまうのです。これは、以前にも申し上げましたが、外科の技術を大いに傷つけるものです[14]。

先ほどの本論に戻りましょう。すでに記したように、学識ある人々でもひとつの、それも酷い病を癒し、別の病を生じさせてしまうことを繰り返しております。それでも我々は水銀の塗り薬を使います。たとえいくらかの不都合があっても、先に述べた緩和剤を用いてその害をなくし、この病気の根源を取り除くのです。そして口中の潰瘍を治し、必然的に起きる他の症状を治したのち、これらの塗り薬を使うのです。水銀は「冷」であり「湿」であるという意見を持つ人もいます。ニコラス・マッサはその著書『梅毒』の中で、それが真実であることを証明するためにサルを実験台にした人たちについて書いています。彼らが水銀を食べて死亡したそのメスザルを解剖すると、心臓の横に大きな凝固した血の塊が見いだされたのです。実験者たちは、それは水銀によって生じた物以外ではあり得ないと言っております。さらに彼らはそのことを確認しました。なぜなら、それは麻痺をもたらしたからです[15]。

この件についてここで論議することはしません。それは私の職業ではないからです。さらに、私は多くの者がこの件について多くの記述を残しているのを見ております。しかし、私はこのことは確かに知っております、水銀は硬い膿瘍を静め、硬い結節を柔らかくし、体を開きこの病の原因を外に出すのです。時には知覚できるほどの、時には知覚できないほどの発汗を起こさせます。ですから、正しく用いればもっとも効果的であり、そうでなければ狂人の手に握られた刃物以外の何ものでもありません。ですから、熟練の外科医にのみ薦められ、さらに確かに熟練の勤勉さと知恵を持って扱うべきなのです。これらの塗布剤によって血液は感染から浄められ、体のあらゆる部分が過剰な体液から浄化されるのです。その結果、良い体液がその在るべき場所で生まれ、再び本来の流れと気質に戻るのです。そして、これらの塗布剤により、体液は本来知られている適切な排出の道へと導かれるのです。しかし、気をつけねばならないのは、少量の塗布剤で効いたように思いこまないことです。また、大量に使い過ぎないようにし、異常にも気をつけてください。塗り薬自体だけでなく、空気、肉、飲み物による養生も同様です。そのような手段によって多くのものが健康になったと思い込まされ、数日後に病が戻ってきて、再びこの病に陥ってしまうのです。塗布剤を何日くらい用いればいいかについては確実な日数はありません。一度にどれほどの量を用いればいいのかも決まってはいません。必要なのは、患者の体力と病の程度によって用い続けることです。常に大いに注意を払い、適切な判断が大事なのです。

さて、治療の手順がこのように適用され、すでに申し上げたことがすべて勤勉に守られ、口中と歯茎が癒され、歯がしっかりと固着したら、続いて患者のシーツを取り替え、清潔で新しい服を着させましょう。それ以前ではいけません。最後に適切な下剤で排泄させましょう。病の残滓をきれいさっぱり流し去るのに適切な下剤を用います。これが済んだ後、必要ならば、一日か二日のうちに瀉血をさせま

しょう。ひと月かふた月は正しい食事療法を行い、その間はきれいな空気のある場所に留まるようにしましょう。

第７章　続き

この治療に必要不可欠な他の薬の説明

ここでこれらの塗布剤に加えて、この病の治療に適切であると証明された他の薬を加えておくことも良いことだと考えました。というのは、酷く感染してしまった患者、病歴の長い患者の中には、悪性で腐食性があり、腐敗し不快な潰瘍をができ、骨が腐り、膿瘍、結節、四肢および他の部位に硬い結節が生じるものがいるのです。このような疾患には、先に述べた水銀で作られこのフランス病の治療に適用される塗布剤を用いる前に、以下に述べる薬が必要になることがしばしばあるのです。したがって、塗布剤の使用は、悪性で腐食性の潰瘍がその悪性を矯正され、腐敗し不快な潰瘍が清められ、腐った骨がきれいに消毒されてからでなければなりません。膿疱や硬い結節はどちらも消散させられるか、切開してすべての汚物や不快な物質を取り除かねばなりません。それを以下の薬によって継続的に行うのです。（処方箋　省略）

第10章

（処方箋　省略）

さて、このように良き読者の皆様はフランス病と呼ばれる病の塗布剤を用いた治療のすべて、用いられるべき手順と薬品のすべての投与法についてもお聞きになった訳です。私の知識と技術の及ぶ限り誠実に真実を記しました。それを用いるのであれば、そこから私が願っており、あなた自身も求めている利益を得てください。我らの善良で慈悲深い神に感謝することを忘れないでください。我々の安らぎ、救い、そして利益のためにそのような治療法を定めてくださったのです。神の良き御心によって、すべての人に健康、病、喜び、悲しみ、生と死がもたらされるのです。神の力により我々は生かされます。神の摂理によりすべての生き物が天上においても地においても統治されているのです。神の恩寵に皆様をイエス・キリストの名において委ねます。キリストにおいて皆様が常に健康でありますように。

終わり

水銀の性質と特性について　外科医G. Baker

神のごときプラトンは健康に関する対話の中で、著者たちの論戦と議論が真実を開くと言っております[16]。それは今のこの時代でも多くの著者に同様にあてはまります。というのは、彼らの意見の相違によって、そうでなければ探そうともしないものが見つかるのです。そして彼らのあらゆる意見の相違の中で、今日もっとも疑いの目で見られているものがあり、それこそすなわち水銀なのです。これはフランス病と呼ばれている病に最も普通に使われているものです。

学識者たちの意見はふたつに分れ、それぞれが大いなる理屈を持って対立しているのです。多くのものが、どちらにつけばいいのか分らずに立ち尽くしております。それゆえ、この機会に私は水銀の特質に関して、私の微々たる知識をもとに自分が信じることを記そうと思います。いくらかは著者たちの書物を読むことにより、さらには私自身の医療行為から判明したことです。しかし、水銀に反対する論述を行っているこれらの学識者たちが実際に実践してみれば、彼らが研究によって持論を維持するようにですが、彼らはむしろこれを擁護する論を執筆するようになるのではないかと考えます。というのはあえて断言いたしますが、なかには真実のためよりも論争のためにのみ執筆するもの、他のものに反論することで己の虚しい栄光とする、そうすることでより有名なものとして数えられると考えているものがいるのです。彼らが決して何事も執筆できるほど学識がありませんように。もし私が経験からそうではないとわかり、理屈も私の側にあるとすれば、私はそれを他の何よりも優先します。というのは、真実は明らかになるものであり、嘘で塗られた議論よりも優先するからです。そして真実のために、水銀によって私が見いだした利点を記します。

まず最初に水銀の性質と特性を明らかにします。というのはそれこそ彼らが糾弾するものだからです。Marianus Sanctus Barolitanus[17] は外科医の技術の最も優れた知識を持つものですが、彼は*De causa &*

*defensione*を著し、やや本題から逸脱し、多くのものが水銀を飲用したが何の被害も実害も被らなかったことを目撃したと述べております。そしてこのことを裏付けるために、ある女性の病歴を記述します。彼女は繰り返し１ポンドと半分の量を飲用し、それをなんの害も被らずに下から排出したのです。さらに彼は、多くのものが水銀を使用することによって致死性の病である腸閉塞によって生じる痛みから救われたと言います。アヴィセンナ[18]もその著書『水銀』の章で、多くのものがこれを内服したが被害を被ってはいないと認めております。またアントニウス・ムーサ[19]もその単一剤[20]に関する著作と金属に関する論考の中で、子供たちに実際に水銀を与えたと述べております。その子らは寄生虫のせいで死の淵に立たされていたのでした。私自身も、真実を知るために、多くの犬やその他の生き物に水銀を与えましたが、それによって害されたものはおりませんでした。これを疑う人であっても認めることでしょう。

ガレノスが水銀は有毒であると断言したという人もいます。実はガレノスは彼の著書『単一剤』の第九書で、実際に使用したことはないと告白しております。それを服用したにしろ、外用として使用したとしても、彼にはそれが致死的であるとは確証できなかったのです。アヴィセンナは子供の頭痛用の塗り薬に水銀を使用しています。さらにMesuea[21]は疥癬の塗り薬に用いています。我々がさまざまな塗り薬に用いるのと同じ量をです。すべての権威あるものの著作を読もうとするものであれば、これがそのような有毒で人に苦痛を与える質のものではないと明白に理解するでしょう。そのように言うものもおりますが。しかし私は、思慮を欠いた取り扱いによって多くの不具合が生じていないとは言いません。それは水銀自体に帰されるべきものではなく、使うものに帰されるべきです。というのはどのような内服用の下剤を用いるにせよ、なんらかの有毒な性質があるのです。しかしそれでも中和剤を使用することによって邪悪な性質から純化されているので、その結果害を与えることなくその役目を果たすのです。

というのは、ガレノスの助言により、さらに他の古代の著作者により、我々は有毒な薬を内服しているではありませんか。例えば、Vipers[22]、ドクニンジン、ヒヨス、マンドレーク、アヘン、ケシ、ヘレボロスなどです。これらは適切に毒を押さえれば、安全に内服できて害はないのです。また、よくあることですが、未熟な取り扱いによってアガリクス、スカモニア、ターペンタイン、Cartem、そうです、さらにはルバーブまで、これらは優れた下剤ですが、（学識者たちが何の害もなく日常的に用いております）多くのものに胃弱という弱点を残しているのです。それが引き起こすのが不消化下痢、すなわち肉を食べると戻してしまう症状で、そこからさらにDiscentera、Tenasme[23]、そしてその他の似たような障害です。それでは我々は思慮に欠ける扱いがなされたからといって、これらの良好で、健全な薬を非難すべきでしょうか。

それならばパンや肉を非難しましょう。というのは、それらを食べ過ぎたために死んだり滅んだりしたものが多くいるではありませんか。飢饉の後と同様に、それらの摂取過剰によってどのような害がもたらされるか我々は知っています。それでも適度に摂取すれば、これほど健康的で栄養に富むものはないのです。同様にワインも節度のない飲み方をすれば、それがどのような悪徳をもたらすか知っております。というのは、ワインは肝臓に害を与えるのみならず、体を冷やし体力を衰えさせるため、めまい、視力の衰え、卒中、さらにしばしば死をもたらすのです。未熟な手によって扱われた水銀を疾患の原因とすることは、もっとも健康的な性質を持つものを疾患の原因とするのと同様に理屈に合わないことなのです。

さて、皆様がこれらの身近な実例を信用なさらないのならば、経験に話を進めましょう。この病に対してさまざまな方法で処置がなされ、可能な治療法を見いだすことができなかった例をあげることができます。それをこの水銀から作られた塗り薬を巧みに扱うことによって、完全に治癒したのです。おそらく皆様は反論しておっしゃるでしょう、一定の期間は治るかもしれないが、いずれ再発するだろうと。その答えとして、私自身のみならず同業者の多くが、すなわちこの市の外科医ですが、多くの患者を治癒させたことを私は証明します。患者たち自身も、か

つてないほど健康であると認めるでしょう。すぐにわかるのです。というのは彼らは血色もよく、食欲もあり、熟睡でき、かつてないほどすべての行為を上手にこなしているのです。そして私は断言しますが、熟練の手によって治療された彼らの誰一人として再発したものはいないのです。ですから、もっとも明白に良しとされたものを用いましょう。そして事実と違うことを信じさせようとする議論は捨て去りましょう。

というのは、(彼らの言によれば）水銀は「冷」で、その冷たさを通して多くの害毒をもたらすというのです。それはまったくの偽りです。ガレノスを読んでご覧なさい、彼の『単一剤』の第四書でそれが正反対だと分るでしょう。また、アリストテレスの第四の書である『気象論』[24]、Haliabas, Paule Agenet, Constantne, Isaac, Rases, Platerius[25] で十分に満足できるでしょう。もし、これらの著作家でも納得させられないのであれば、経験に教えてもらいましょう。というのは水銀は軽減し、解消させますが、これは「熱」の作用です。「冷」の作用ではありません。彼らが水銀を「冷」だと言うのは、それが鉛でできているからです。ですが、そうではないのです。というのは、石灰は白亜でできており、これは「冷」の石ですが、石灰は「熱」なのです。それを証明する他の多くの実例を出すこともできますが、話が冗長にならないように、公平な読者にこの件について記してある他の著作への言及は避けます。それらと並んで、この著作は、真の医療行為のために、我が国の言語によって書かれたもっとも主要な著作のひとつであります。２度の校訂を経て、拡充もされ、そのためには大いに苦心を払ったのですが、著者が望むものは良き言論だけなのです。中には我々に報いるに邪悪な言葉と我々の著作を汚そうとの目論見を持ってするものもおります。彼らの意図と知恵が一致すればでありますが。しかし、彼らについてこれだけは知っていただきたいのですが、我々二人は我々の著作に難癖を付け、我々の行為への反論を理屈で証明できるというものたちが彼らの人生で見た数より多くの患者を治癒させたのです。私が思うに、それは妬みであって、この件の真実を探ろうという熱意ではないのです。他人が自分たちよりうまくやっているのを見るのが不満なのです。

彼らが我々に悪意を持ちませんように。というのは、皆様のご好意のなかで我々は義務を遂行しているのです。おそらく、彼らも我々と同じくらいこの市とこの国の別の場所で医療に携わっていれば、我々と同様の良い行いをすることでしょう。彼らがその義務をしかるべく遂行すればですが。そうでなければ、確かに彼らは長く医療に携われば携わるほど、彼らにとって悪いこととなるでしょう。そんなものは目にしたくはありません。というのは、すべての誠実な医療技術者の心の安らぎは、教授たちが、特にひとつの団体、組織として栄えるのを見ることだからです。一人でも義務を果たさないものがいれば、残りのすべてのものがさらに悪しき振る舞いをすることでしょう。ですから、我々はお互いに安らぎとなり、他のものの行為を汚すことのないようにすべきです。神に願います。我々をよみしたまい、皆の心がひとつになり、この国で義務を果たすことができますよう。神の栄光のために、お互いが助けとなり安らぎとなりますように。

注

1）The English Experience, 443, Theatvm Orbis Terravm Ltd., Da Capo Press Inc., New York,1972.

2）George Baker（1540-1600）。ロンドンのBarber Surgeons' Company（医療行為も行っていた理髪師の組合）に所属していた外科医。医学書の翻訳や、植物から抽出したオイル、ハーブの使用法などの著作が多い。*Dictionary of National Biography,* 1885-1800, vol. 3 に記載。

3）John Banister（1533-1610）。イギリスの解剖学者、外科医。クロウズとともに戦地に派遣されたこともある。

4）古代の医学では、体液の性質や流れ方と病の関係を緊密に連携させる体液病理学が確立していた。ヒポクラテスの考え方を受け継いだアヴィセンナもその書『医学典範』で季節の変化が身体に及ぼす影響について詳しく述べている。(檜學・新家博・檜晶共訳、第三書館、187-191頁。)

5）ここで挙げられている軟膏のうち、アラゴンの軟膏とアグリッパの軟膏は不詳である。テレビンのオイルは、いわゆるテレビン油であり、松科の植物の油性分を含んだ樹脂から抽出したものであ

る。カモミールは紅茶の風味付けなどにも使われている。イノンドは料理にも使われるディルのことである。

6）fasting spittle.　朝食前の唾液には薬効があると信じられていた。OEDは、この唾液には蛇をも殺す力があるという1607年の用例を掲載している。

7）Aquae Vitae.　直訳すると「命の水」。精留されていないアルコール、ワインを蒸留して作られることが多かった。

8）Nicolo Massa（1485-1569）。ヴェネチアの医師で解剖学者。自ら多くの解剖を行って、中世からルネサンスまでの西洋医学の基盤ともなっていたガレノスに多くの誤りがあることを主張する記述を残している。ガレノスは主に動物の解剖を行ってそれを人体にあてはめていた。近代的な人体解剖の先駆者と言われるヴェサリウスの著作『人体の構造』も、自分たちがすでに明らかにしている知識の寄せ集めだとして、とりたてて新しいものはないと主張している。

9）ディエゴ・グラシア・ギレン他著、寺澤孝明訳『薬の文化誌』から、ガレノスの分類を引用する。「ガレノスは薬の効果や効力を４段階の評価とし、さらに０度（緩和）を追加した。この評価によれば「０度（緩和な）」薬の使用とは、投与した身体のどこにも効果が現われない場合である。熱で第１度の薬とは意識しないと感知できない微細な作用を起こすものを指す。第２度の薬は効果の発現があるもの。第３度は大きな効果があるもの。第４度の薬は強すぎて患者に障害を起こす点数である。

URL:www.touyakukai,com/IT_kusurinobunkasi/

10）これはヒポクラテスの『箴言』第一章の六に記載されている言葉である。大槻真一郎他訳では「とくに重い病気には、とくに厳しい治療法がもっとも有効である」となっている。（ヒポクラテス全集、エンタプライズ、第一巻、518頁。）

11）ヘレボロス（Elleborus）は日本ではクリスマスローズの名称で知られるキンポウゲ科の植物。ユリ科バイケイソウ属の多年草。根からは殺虫剤がとれる。下剤や強心剤などに使われた。スカモニア（Scamony）はヒルガオ科の植物で樹脂が下剤などに使われる。

12）グアイヤック（Guaiac）は西インド諸島および南アメリカ北部海岸に自生する常緑高木。梅毒の治癒に効果があると考えられていた。1577年にロンドンで出版された*Joyful News Out Of The New Found World*に、コロンブスの後にサント・ドミンゴ島に言ったスペイン人たちが島の女から梅毒をうつされたが、グアイヤックから抽出した薬で治癒したという記録を掲載している。日本ではユソウボク（癒瘡木）と呼ばれている。文字通り、梅毒を癒す効能を持った樹木ということである。クロード・ケテル著『梅毒の歴史』（寺田光徳訳、藤原書店、49頁）にはこの樹を粉末状にして、とろ火で煮て煎じ薬にしたものを、暑い部屋の中で節食を続け、下剤をかけられた上に毛布で身体を覆って汗をかき始めた患者に大量に飲ませるという処方を30日間続けるという治療法が紹介されている。

13）ここでいうインドは、前注にあるグアイヤックが自生する西インド諸島を指す。

14）クロウズは本書の第四章でも似非医者を厳しく糾弾している。

15）この部分の記述は簡略すぎるように思われる。マッサの立場はどうだったのか、誰が実験を行ったのかが不明である。同じ著者による*Book of Observations*の第７章も水銀の特性について扱っており、こちらの方が記述が正確であるように思われる。*Book of Observations*では、マッサは水銀を「熱」で「湿」であると断言しており、「冷」であるとしているアヴィセンナの意見と対立していると記されている。水銀を飲んで死亡したサルの解剖が行われた際に、血液が凝固していることが判明したという前例を引用しているのはアヴィセンナである。彼はこの実験結果を引用することで、これこそ水銀が「冷」である証だと主張しているという記述が続く。ただしこの解剖を行ったのがアヴィセンナなのかは明瞭ではない。クロウズはこの結果は水銀が「冷」であるという証拠としては脆弱であると述べ、水銀が致死的ではないことを証明するために、著名な医学者の擁護論や水銀を飲用しても被害をこうむらなかった例をあげている。本書の記述は一般読者向けに簡略な記述となっている。*Book of Observations*を出版する際により詳細で正確な記述にしたと考えられる。

16）プラトンは師のソクラテスから主知主義を受け継いでおり、その著作にみられる対話によって真理を追究していく方法論に言及しているのだろう。

17）16世紀のイタリアの外科医。会陰切開による結石の除去手術で知られる。著書のDe causa & defensioneは『原因と予防』という意味。

18）ペルシャ生まれの中世医学を代表する医者であり哲学者（980-1037）。Avicennaは英語圏での名称。医学においてはガレノスを継承した。前述の『医学典範』はヒポクラテスやガレノスを基本として

理論的な医学体系を構築するための著作である。

19）Antonius Musa（生没年不詳）。ギリシャの植物学者でローマ皇帝アウグスティヌスの内科医も務めた。

20）中世医学では薬に薬草を用いることが多かった。単一剤とは１種類の薬草成分で作られているものを指す。複数の成分を用いると、複合剤となる。

21）おそらくJoannes Mesue、1015年に死去したフランスの医学者と思われる。英国のWellcome Libraryに薬の処方箋を記した著作が所蔵されている。

22）以下に列挙される薬草について記しておく。

Vipers　おそらくViper's Grass、キク科のフタナミソウ属と思われる。和名ではキバナバラモンジンとして知られている。あるいはBugloss Viperならはムラサキ科のハーブ。これは下剤として使われる。

ドクニンジン（Hemlock）ソクラテスが獄中で飲んだのがこれだと言われている。

ヒヨス（Henbane）なす科の有毒植物。

マンドレイク（Mandrake）地中海地方産のナス科の有毒植物。根は催眠剤や媚薬として用いられた。錬金術や魔術で言ういわゆるマンドラゴラである。

アヘン（Opium）とケシ（Poppy）は言わずと知れた麻薬である。

ヘレボロス（Hellibore）前出（注11）。ユリ科バイケイソウ属の多年草。根からは殺虫剤がとれる。

アガリクス（Agarick）ハラタケ科のキノコ。

スカモニア（Scamony）前出（注11）

ターペンタイン（Turbith）アサガオ科の植物。下剤の成分を根に持つ。

Cartem　不詳。Caryitesならば、有毒のタカトウダイが該当する。

ルバーブ（Rubarb）。タデ科の植物で、漢方でも用いられる大黄を根茎の成分として持つ。

23）discenteraはおそらくdysentery（赤痢）であろう。tenasme（tenesmus）は裏急後重、すなわち渋り腹のことである。

24）アリストテレスには自然学の分野に関する４つの著作がある。『自然学』『天体論』『生成消滅論』そしてここに挙げられている『気象論』である。ただし、第４巻はアリストテレスのものではないという論もある。

25）Haliabasはペルシャの内科医アリー・ブン・アルアッバース（994年没）のラテン語名Haly Abbasであろう。医学の百科事典ともいえる*The Complete Art of Medicine*の著者として知られている。

Paule Agenet　ギリシャのアイギナ（エイナ）島生まれの内科医（625-690）。７巻からなる医学大全の著者として知られる。

Constantne　チュニジア生まれの医師コンスタンティヌス・アフリカヌス（1017-87）であろう。アルアッバースの著作をラテン語に翻訳した。

Isaac　おそらくエジプト生まれのIsaac Judaeus（832-932）と思われる。腎臓病学の基礎を築いたといわれている。

Rases　ペルシャの錬金術師、医学者であるアル・ラーズィー（865-925）のラテン名Rhazes（Rhasis）と思われる。

Platerius　中世植物学の知識を集大成したMatthaeus Platearius（1161年没）であろう。